

毎日歌壇

米川千嘉子 選

ありふれた気持ちではないから痛い心は誰のことも頼れない じくば市 豊富 瑞歩

△評▽第3句「から痛い」で句切れになる。

「痛くてもまかさず一人」でそれに向き合う。勇気と生のエネルギーがこぼれ。

「もうすこし辛抱しなさい」人影を差して消えゆく熊の親子は 池田市 黒木 淳子

△評▽餌を求めて人の生活圏に出没する熊。人に追われる熊の側に焦点をあてたら。それでもね、「誰かたすけて」の誰かに私が含まれていてほしいの 京都市 小池ひろみ

悪いことしてないんだと泣き叫ぶ子等。爆破の瓦礫に裂けた膝の血しづき 八王子市 堀 青子

子らが死ぬガゼを見た子は「戦争」を「受験」に付けてけして言うまい 静岡市 柴田 和彦

買う意思を伝えてからも値引きしてもらって店を出れば夕焼け 松原市 たろりずむ

上海で生まれた僕の初恋は「ちゅん」と手鼻の中国少女 大阪市 中谷 政義

吊革を握る掌がふと感じる指紋に指紋がからまのくくるを 横浜市 大建雄志郎

戦争を知らない団塊幼き日貧しかったとおさな子見つむ 野田市 片倉 伸明

鳥海山の湧き水忘れず群をなし鮭上りたり牛渡川を 鶴岡市 大沼 葉子

加藤 治郎 選

くらやみ、ちい／＼ほね、かわけたいきあめ、よかせ、い／＼／＼、ね／＼あな、星 宮島市 塩見 伴

△評▽前衛である。暗闇、血、肉、骨、皮、毛、大気、雨、夜風、引力、熱、貴女、星と読んだ。身体と宇宙が融合した世界だ。

シャープペンにシャープペンの芯が入る時シャープペンの芯は息止めるだろう 広島市 堀 眞希

△評▽私の意識がシャープペンの芯と一体になっている。特異な緊張感のある作品だ。

将来は介護施設で懐かしのパンクロックを聴き眠るのか 横浜市 友常 甘酢

たぶらってこたえるときまばたきのような祈りの向こうの曇天 八尾市 瀬戸口祐子

やわらかい言葉を選ぶ ほんとうに殴りたかったものを忘れて 所沢市 神田 望

安っぽいカップケーキの頂上できらきらひかるそれが夢です 津市 川原田明子

地下アイドルが踊るイベント前のリハその横でカレー屋の順番を待つ 相模原市 富里 泰男

叱つたら「びえん」と言つて逃げてゆく秋風に乗るやうな女生徒 名古屋市 浅井 宏宏

だれかの夢のなかを歩いているような夜の散歩、雨が降り始める 三鷹市 菅原 海春

メロディが回転木馬のメロディが流れて今日が狂い始める ふじみ野市 雨雨雨汰

水原 紫苑 選

恐竜に自由に空を舞う鳥になれたかたか尋ねたかた 倉敷市 中略 修平

△評▽現在の鳥類の先祖は恐竜らしいが、鳥たちの自由なイメージは恐竜にはない。きつと鳥を見たらうらやましがらうだろう。ジャン・ダークと書かれしころの波と雲の一人称はわたくしならむ 横浜市 森山 緋紗

△評▽ジャン・ダークとはジャンヌ・ダルクのかつての表記。時代と自然が響き合う。生命を手放せば美しき残像になるとまわるポイルドエッグ 東京 富見井高志

しね きつと私も言われているだろう欠けゆく冬の月の鋭角 京都市 小池ひろみ

星々を白い糸で繋げれば夜空をめぐる馬車の路線図 碧南市 江原 冬莉

夕暮れのほとりわたしのうしなつた影がしずかに佇むまちで 札幌市 鈴木 精良

深青のねむけぼやぼや充ちてゆきほくにたやすく銀河の重み 東京 アナコンダにひき出た不精の折鶴なんかほつといて飛びたがりやの紙飛行機を 福津市 原田 冬

人格のほつれの先に空洞があることまでを含めて織維 豊橋市 太田 貴大

繋ぐ手を離せば指にはち／＼とラムネのごとく血は流れゆく 堺市 初夏みどり

伊藤 一彦 選

一時間一本のバス乗り損ね行き先変わる秋の好日 名古屋 咲花徳太郎

△評▽「好日」がポイント。予定を変え別の行き先のバスに乗って楽しむプラス思考。ただし時間に余裕のある人でないと。戦争の歌をリアルに作れない団塊世代を誇りに思う 倉敷市 中略 修平

△評▽戦場を知らず軍隊体験を持たず、戦争の歌を作れないことを誇る団塊世代。戦争を知らない人は一億人 知らないままで逝きたく思う つくば市 小林 浦波

いままでいちはん好きな柔軟剤わたしを洗ふとき使いたい 陸前高田市 藤田ゆき乃

吾を発して吾に戻り来る風のある孤独を鳥にいかで伝えむ 川崎市 河村 俊秋

一人がいい一人にしてと言ったのに一人は嫌と二分後に言う 浜松市 久野 茂樹

暴かれしハラスメントに華麗なる舞台の上の薔薇は萎れり 新発田市 飯田 英範

口がある側こそ黙れ孤独死は状態であり気持ちではない 福津市 原田 冬

人々の行き交ふ園の藁むぎに甘え上手の寒牡丹なり 香取市 嶋田 武夫

気嵐の立つ海見つつ介護士は早出の為に施設に急ぐ 須崎市 野中 泰佑

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます

次回12日に掲載します。